聖天使ユミエル III
ダークリバイバル

立ち読み版

小説 黒井弘騎
挿絵 本町圭祐

序章 007
第一章 蠢動 009
第二章 再会 044
第三章 消えない悪夢 097
第四章 終末の影 153
第五章 奪われた翼 221

登場人物紹介

Characters

羽連(はむら) 悠美(ゆみ)

光翼天使ユミエルとして、エクリプスと戦い続ける少女。内向的かつ純情で無垢な人柄だが、その純粋さゆえに悪を憎む気持ちは人一倍強い。

羽連(はむら) 真理(まり)

悠美が「ママ」と呼ぶほどに慕っている、彼女の育ての親。先代の光翼天使。

――あ、くくぅ……っ！　ど、どこまで辱めれば！

プライドを傷つけられた怒りが、マリエルの精神力を復活させた。驚異的な克己心で、なんとか絶頂を食い止める。もっとも、それは破滅を先延ばしにしただけだ。身体はますます熱くなり、狂おしいまでの肉欲が湧き起こる。それでも意識を集中し、勝ち目のない戦いを続ける紅き天使。その不意を突くように、右手と胸間の男根に異常が生じた。

「うごおぉぉ！　で、出る……ぐがぁ、出るぜぇ！」

胸の谷間で柔肉を貪っていた剛茎が、暴力的な脈動をさらに加速させた。

同時に、右手で手淫をしていたペニスも、ビクビクと震え始める。

「く、俺もだぁ……へへ、手袋真っ白にしてやるよ！」

ぶっしゃあ！　びちゃあぁ！　胸と右手とで、白いマグマが同時に噴出する。夥(おびただ)しい量の精液が溢れ返り、右の手袋は元の色が見えないほどに汚辱された。

野牛の胸射を受けた豊満なおっぱいも、濃厚な汚濁液でべたべたに汚される。獣人の牡汁はスライムのように粘り、柔らかな胸玉にねっとりとへばりついた。右胸を覆うコスチュームも、大量の粘塊によって見るも無残に汚し尽くされる。胸からお臍まで続く十字型の割れ目を埋めるように、汚らしいねばねばが流れ垂れた。真紅の聖天使は、胸から生クリームを零したような、だらしなくもいやらしい姿に貶められた。

むんっと香る男の匂い、どろどろと粘る精液の汚感、射精を終えながらもいまだ動きを

やめないペニスの脈動――優しく柔らかい慈母の肉体を、下卑た男の欲望が汚し尽くす。
「ひひ、正義のヒロインがヌいてくれたぜ！　夢みてぇだ、ありがとうよ淫売天使サマ！」
ぬるん、と右手から肉根が抜けた。尊厳を辱められ、戦士の瞳から苦辱の涙が零れる。
――くぅ、そ、そんな……。ああ……わたし、なんてこと……っえ、ひ⁉
光翼天使のコスチュームとともに、勇士の誇りまでもが汚された。胸に広がる決定的な敗北感――そのショックで集中が途切れた。意識しないようにしていた両穴内の肉具責めが再び感じられ、変身聖母の性感を刺激する。必死で押しとどめていた反動で、肉愉のぶり返しは激しかった。潤みきった蜜壺を混ぜくり返されながら恥ずかしい汁を吸引され、もどかしく切ない痛痒感が下腹に広がっていく。布地越しに肉蛇に肛門をほじられ、腸壁を擦り責められる。前も後ろもいっぱいにされて可愛がられ、怒濤の快感が湧き上がる。
「あ、くうぅっ……ダメ、とまってぇ！　わたしぃ……いやっ、ま、またイク……ッ！」
敗北の嬌声とともに、細い背筋が大きくしなる。ばたつく光翼は小さな羽根を散らし、そのまま萎びて動かなくなった。またしても大量の本気汁が噴出し、太ももどころか教会の石床にまで液溜まりを作る。二度目のオルガはなかなか去ってくれず、マリエルはぜぇぜぇと苦しげに息を吸いながら、涙を流し恥辱によがり続けた。
「おいおい、気持ちいいのはわかるけどよぉ、余韻に浸ってんじゃねぇぜエロ聖母さま」
陵辱者は僅かの休息も許さなかった。汗に濡れ乱れた金髪を、バイソンの豪腕がヴェー

ルごとわし掴みにする。そして、抵抗を許さない怪力で下向きに力がかけられた。顎先が喉にくっつくほど頭が下げられ、濡れた唇が胸間の亀頭に近づけられる。至近した肉棒から香るすえたような牡臭が、絶頂聖母の肺腑を満たした。

「ほれ、抜いたあとは綺麗に舐めとるんだよ。可愛い舌出してちろちろとよぉ、ぐへへ！」

「あ、うぐうぅ……は、はひぃ。んぷ、ちゅっ……む」

二度にわたる絶頂によって、マリエルは抵抗する自信をなくしかけていた。敗北したヒロインは陵辱者の命に従い、涙ながらに口舌奉仕を開始する。

ぺちゃぺちゃ……くちゅるるぅ。聖母は汚液まみれの肉棒を巨乳で挟み込んだまま、弱々しい舌使いで影魔を慰める。苦い牡味が口中に広がっても、聖女は従順に舌淫奉仕を続けた。しばらくすると、バイソンのペニスは勢いを取り戻し、硬く太く膨らんでくる。

――そ、そんな……。ま、また……こんなに大きく……!?

発射したばかりだというのになんという回復力か、剛茎はすぐさま最大勃起にまで復活した。しかも、復活巨根は早くもビクビクと脈打ち、またしても発射態勢に入っている。

「ククク、まったくもって罪な身体だな。まるで男に奉仕するために作られたかのような淫猥さだ。よいのか光翼天使よ、それではいつまで経っても我との契約を遂行できぬぞ？」

「んぱ、ちゅぷぅ……ねちゅ。え……ふ、ふぁ……？」

慄(おのの)きながらも太棒を舐め続ける聖天使に、悪魔王が奸知を滲ませる声で話しかけた。

「そやつは一度果てたが、まるで鎮まっておらぬ。よもや、それで我との約定を果たしたなどと思ってはいまいな？　娘を救いたければ、一滴残らず搾り取って満足させるのだぞ」

――くっ……そ、そんな。ひどい……！

絶望がよぎる――欲望の塊が完全に満足するまで奉仕しろというのだ。しかも、無数の淫獣に対し、たった一人で。だが、最愛の娘を盾に取られた母に、選択権などなかった。

「く、うぐ……！　はむ、んむっ、んちゅるぅ……ちゅぷ……っん！」

覚悟を決めた殉教者は肉柱を舐めしゃぶりながら、震える腰を必死で前後させた。悲壮感さえ漂う奉仕を続けるマリエルの舌先で、忌まわしき獣根は再び激動する。

「おおお……お前の舌使い、エロすぎんだよ淫乱聖母が！　また出るぜぇ……ぐはは ぁ！」

先ほどと少しも変わらない猛烈な勢いで、野牛の男根が灼熱を噴出した。至近距離からぶっ放され、聖母の顔面を濃厚なクリームが覆い尽くす。猛烈な勢いで発射された白濁は高くアーチを描き、頭頂にまで届いてヴェールをも白く濡らした。重力に従いボタボタと垂れる精粘は前髪を濡らし、鼻の頭を通って顎の先にまで糸を引きながら美顔を汚す。

「うはぁぁ……くう。こ、こんなぁ、イヤぁぁ……っ」

顔面を隅々まで汚辱され、愕然とするマリエル。零れる涙も、濃密な粘塊を洗い流すことはできない。射精を終えた獣人に代わり、今度は梟（ふくろう）の影魔が肉棒を胸乳にはめ込んだ。

「ほほ、わたしは彼のようには動きません。ご自分でしっかりとパイズリしてくださいよ」

「く、は……はひぃ。わ、わかった……わかり、まひたぁ……」
顔射の忌まわしい衝撃を引きずりながら、聖女は両手で挟み込むように胸房を掴む。生乾きの精液に汚れた右手が裸乳に触れ、にちゃっといやらしい水音を立てた。新たな淫茎を双膨の間に挟み込み、吐淫に濡れたおっぱいを動かし始める。肉棒の熱と硬度、それにぶっかけられた白粘と先走りが混じってのヌルヌルした感触が、聖母の胸乳に複雑で快美な悦楽を芽生えさせる。知らず知らず、マリエルは積極的に胸肉をこね回していた。
「ほほ、なかなか要領がいい……もうすっかり男を悦ばすコツを覚えたようではないですか。そうだ、舌もお使いなさい。おっぱいで揉みながら、可愛らしい舌でほじるのです」
「ふぁ、はひ。こ、こうれふか……んぅっ、ちゅぷむぅ……」
屈従のヒロインは、言われるままに舌を伸ばし亀頭を慰めた。開いた鈴口に舌を差し込み、溢れる先走りを吸い舐める。生乾きの精液で汚された顔は、恥辱と快感に甘く蕩けていた。腰を振りながら乳と舌とで奉仕を続ける聖母の姿は、なんとも淫らで艶めかしい。
「しゃしゃ、美味そうにチンボしゃぶりやがって。俺も出してやるぜ、尻穴の中によ！」
「んちゅ……ぷぁ、え⁉　そんな……いやっ、う、うしろは……あぁぁ！」
突然マリエルの背筋が伸び、怯えたように翼が震えた。いったん腰を引いた蛇人間が、スーツの上から肛門めがけ、猛る肉牙を無理矢理に差し込んできたのだ。みちみちと腸管が軋む感覚が、悶える聖女をバックから嬲り苛んだ。極薄の生地とはいえ、聖天使のコス

チュームとショーツの二枚を纏っての太槍による排泄口への挿入は、いくらなんでもきつすぎる。アナルレイプの激感に、肛虐のヒロインは腰を動かせなくなっていた。

「キツキツだ……最高だぜ！　休む暇ぁねえぞ、もっと腰使え、ケツ振りまくれぇ！」

ビシッ、バシィ！　乾いた打撃音が響く。動けなくなった聖母に腹を立て、蛇男は乱暴に豊尻を叩きまくった。スパンキングのたびにビクビクと尻玉が揺れ、ぎこちなく腰が左右に蠢く。腰が揺れれば肉槍もずれ動き、腸内が痛痒く痺れてくる。重い肉感が内臓にまで響き、聖母は息も絶え絶えに苦悶した。尻肉奉仕ですでに準備できていたのだろう、蛇の男根は腸内に半ばまで砲身を埋め込んだところで大きく蠢き、灼熱の汚濁を噴出する。

「ひ、ひぎぃぃ⁉　お尻のなかぁ……ひっ、熱うぅ……っ！」

聖衣を染みて、汚辱の熱さが肛門壁に伝わってきた。腸内を犯す異形の感覚に、マリエルは涙を流して苦悶する。だがその声には、秘せない快感の響きがあった。それが証拠に、痛くてきつくて動かせなかったはずの腰が、いまやビクビクと振りたくられている。揺れ踊る尻房の間からコスチュームを伝い、蛇の精液がぽとぽとと垂れ落ちていた。

「ケケ、随分気持ちよさそうだねぇおねーさん、じゃあ、ボクも注いであげるよ……吸ったぶんまでたっぷり出してあげるから、いっぱい感じて可愛くよがりまくってね！」

「はっあ、ふぁ⁉　だめへぇ……も、もぉ！　こ、これ以上は、わたし……いっ！」

ぐちゅ……じゅばあぁぁぁぁ！　聖母の懇願も虚しく、セミの嘴から汚辱の証が吐き出

された。小柄な体躯に似合わず、その発射量たるや野牛男や蛇人間よりも多いほどだ。子宮口近くで大量の灼熱が炸裂し、脳裏をピンクの電撃が覆い尽くす。大量のスペルマが延々と注ぎ込まれ、天使の股間から終わることなく淫辱の混合液が垂れ続けた。

――ダメ……熱いの、いっぱいで……！　ま、またくる……イカされてしまう……！

胸も尻も指も子宮も――豊満な肉体を執拗に可愛がられ休む間もなく責め抜かれ、マリエルの正気が消えていった。影魔の妖異な肉体に弄ばれ、それに変態的な虐悦を覚えてしまっている。気高き聖天使は、もう戻れないところにまで堕しかけていた。

「い、イクッ……らめぇ、イカせないでぇ……や、また！　ふあ、イッてるぅぅ……っ！」

腰を振りたくって迎える、三度目の絶頂。愛蜜とともに、涙と涎も流れ出して止まらない。恥虐の聖天使は全身をビクビクと震わせ、あられもない嬌声を上げよがり狂った。

「ふん、派手な絶頂だな。まったく淫乱な女だ。だが、お楽しみに水を差すようで悪いのだが……いちいち果てていては、もう時間がないのではないか？　ならば提案だが……」

半ば思考をやめた絶頂天使の脳裏へ、屈辱に満ちた悪魔の提言が下された。

「自分から懇願したらどうだ？　慈悲をください、みんなで一斉に犯してください、とな」

「へ、ふぁ⁉　そ、それ……ひゃらぁ。やらろぉ……そ、それだへは……いやぁ……」

無意識のうちに、マリエルは咄嗟に答えていた。何度も快感に押し流されながらも、なんとか残った戦士の本能が、最後まで堕ちきるのを拒否する。だが――。

「マ、ママぁ……やだ、ママぁ……！」
自分を呼ぶ力ない声に、マリエルの瞳がかすかに光を取り戻す。恥辱と悦楽の涙で曇った瞳でも、助けを求める愛娘の姿は、くっきりと映っていた。
――ゆ、み……悠美！　そうだ、わたし……わたしが、悠美を助けなくちゃ……！
ただ一つの願いが、肉奴に母の強さを取り戻させる。決意したら、もう、勝手に唇が動いていた。あまりに屈辱的な隷属の言葉を、たどたどしく紡いでいく。
「あ、あの……。わたし、を……」
恥ずかしい、悔しい、死んでしまいたい。でも、これしか悠美を救う手段がない――聖母は自分にそう言い聞かせた。乱れ狂う未来の姿が浮かび、じゅん、と子宮が疼く。
「……どうにでも、お好きに……してください……！」
それは、誇り高き戦士の、人生最大の屈辱だった。だが、隷従宣言を終えても、少しの反応もない。それどころか、いま自分を責めている怪人までもが動きを止めていた。
――な……くうぅっ⁉　わたしを、どこまで……！
静寂の中、マリエルは影魔どもがなにを期待しているのか察した。まだこれではダメなのだ。もっと淫らにあさましく、淫乱売女のように狂って誘わなければ、許されないのだ。
「あ、あの……。お、お願い……です」
マリエルは精一杯に腰を振り、乳揉みを痛いくらいに激しくした。羞恥とともに身体中

で炎のような激悦が湧き上がり、気が遠くなる。それでも、聖天使は精一杯に女体を蠢かし、艶めかしく媚びた声を作って呼びかけた。

「わ、わたしを……犯してぇ、くださいぃ……！」

屈辱の言葉を述べながら、マリエルは自らをできるだけ淫らに見せるべく、大きく腰を振り、力を込めて胸を揉みしだいた。前後に肉凶器を差し込んだまま下半身を動かせば、精液と愛蜜で溢れ返っている牝壺の中で、硬い肉嘴に粘膜を抉り責められる。胸の谷間で脈動する梟の肉根も、おっぱいを痛いくらいに刺激してきた。苦悶と屈辱の中、聖女の顔は真っ赤に染まり、徐々に息が荒くなってくる。

「お願い……で、すぅ……。わっ、わたしを……もっと……ぉ！　くぅ、はんぅぅ……」

胸も前門も尻穴も、いまでは心地よい快美を送ってきていた。天使に取りついている怪人たちが、ゆっくりと動いて熟れ肉を責めてきたのだ。それが気持ちよくて、もっといろんなところを抉ってほしくて、マリエルは激しく腰を使いまくった。おっぱいに当てている手にも力を込め、ビンビンにしこった乳首同士を擦りあわせ、肉具をはめ込んだ双穴を自虐的に刺激する。そうしているうちに、聖母の身体は、どんどんと熱くなっていった。

「あ、んはぁぁ……。はくっ、きゅふぅぅん……」

甘えるようなよがり声が、もう抑えきれない。これは演技だ、演技のはずだった。なのに、本当に気持ちよくなって、もう歯止めが利かない。秘所からは大量の本気汁が滝のよ

うに流れ続けていた。惨めな牝のマゾヒスティックな本能が、戦士の矜持を凌駕していく。
――き、きもちいい……？　なんで……こ、このままじゃ、本当に堕ちてしまう……！
マリエルの中で、一瞬、自分が壊れていく恐怖心がよぎった。だが、そんなものは、この圧倒的な愉悦の前には無意味だ。いまはそんなことより、もっと虐めてほしい。汚してほしい。滅茶苦茶に壊してほしい。この快感さえあれば、もう、どうなってもいい――聖女が気付いたときには、本能に支配された肉体は、勝手に服従の言葉を述べていた。
「お、お願いぃ、犯してぇ……もっと、もっとぉ！　はぁ、もう我慢できないのぉ！　んあぁ、お願いですぅ！　はしたない牝豚めを、みなさんで滅茶苦茶に虐めてくださいぃ！」
言いながら、聖女は腰を大きく突き出した。セミの嘴が子宮口にまで一気に達し、電撃のような快美感が迸る。梟に奉仕している両の乳肉に指を埋め込むと、焼けるような痛みを伴う激悦がおっぱいで爆発した。鳥怪人に胸射を放たれ、セミと蛇に二度目の汚濁を注がれ、被虐の魔悦が迸る。マリエルは逆らわず、四度目の絶頂へと上っていった。
「あひぃっ、いい！　わたしまたイクぅ……気持ちよすぎて、イッちゃうぅ！　でも、もっとイキたい……お願い、狂うまで、イカせてくださひぃ、いひぃいぃ――っ！」
破廉恥な願いを述べながら、マリエルはいままでで一番激しい絶頂を迎えていた。ピンと張った背中では四枚の翼が大きく広がり、顎が限界まで反らされて金髪が舞い乱れる。あまりの解放感に筋肉が緩み、牝液だけでなくおしっこまでもが漏れ出してしまっていた。

放尿絶頂は長く続き、聖天使は極上の快楽を貪り続けた。被虐の肉愉に屈しあらゆる虐悦を受け入れ、涙と涎を垂れ流して悦び喘ぐ聖母のよがり顔は、淫乱な牝豚そのものだ。
「ははぁ、イカせてくださいだとよぉ、あひゃひゃ！」
「堕ちた！　ふひひ、天使さまが牝豚に堕ちたぜぇ！」
獣じみた喚声とともに、すべての方角から、無数の影魔が同時に飛びかかった。異形の手が、口が、舌が、そしてペニスが――数多の肉の責め具が、一斉に聖贄へと躍りかかる。
「あ……や、うあああああ……！」
圧倒的な肉の群れを前に、抵抗する力も術もない。生贄の聖母天使は床に押し倒され、淫獣の群れに貪られる。神聖なヴェールがむしり取られ、太い硬茎がブロンドに直接押しつけられた。たわわな胸の肉を掴まれ、揉まれ、噛まれ嬲られる。
「ひぎぃ、ひああ、あ……はひぃ！　いぃ、いひいぃぃぃ……！」
濡れたショーツが引き剥がされ、前後の穴に、同時に四本もの肉槍が突き刺される。我先にと内臓を貪りあう肉蛇たちは、精液を零しながら肉穴を穿ちまくる。
――こ、壊れる……！　わたしっ、壊れちゃう……！
視界を覆い尽くすほどの白い液濁が、全方向から浴びせられる。全身余すところなく弄ばれ、貪られる。獣じみた陵辱の宴は、いつまでも終わらない。
「はぐあぁ、イク……イクぅ……！　あふぁぁぁん、はひぃぃぃあぁあぁ――――ッ！」

漆黒のドレスに身を包んだ美少女が、どこまでも無垢に、そして残酷に笑っていた。

※

狂気のプリンセスが居を構える悪魔の城、無数の触手を伸ばした生ける巨塔の内部は、吹き抜けの縦穴構造になっていた。足場も出口も見当たらないホールの宙空で、光の輪を戴いた少女天使が、激しく飛び交いながら空中戦を演じている。たった一人で戦い続けるユミエルの相手は、四方八方から迫りくる、粘液を滴らせたおぞましい無数の触手どもだ。

「っふぅ！　せぃ……やああああああああああッ！」

ズバッシャアアアア！　聖剣の一閃で、十を超える触手獣がなぎ払われた。細い肉ミミズは一撃で両断され、太く屈強な怪蛇も致命的な打撃を受けてのたうち回る。

どくん。大きな脈動が聞こえ、天使の周囲を囲む内壁が蠢いた。ユミエルが閉じ込められた影魔塔の内部では、触手だけでなく壁自体も生命体のように蠢動しているのだ。臓物の内側を思わせるおぞましい肉壁は半透明の粘液に包まれ、大小様々の肉瘤が常にぼこぼこと脈動を繰り返している。天使と相対する大小数多の触手は、その内壁から血管のように生え出ていた。内臓じみた壁が脈を打つたび、新たな肉紐が伸びて侵入者に迫る。

「はぁ、はぁ……っく！　この……っ！！」

視界を覆い尽くす触手群が織り成す波状攻撃に、ユミエルは呼吸を整える猶予すら与えられない。生ける魔塔の内部に閉じ込められた少女は、無尽蔵に襲いくる触手怪物と延々

と戦い続けていた。純白のケープは切り裂いた化物のねっとりとした体液に濡れ、これまでの戦いの激しさを物語っている。黒いスーツは噴き出す汗で肌に張りつき、スレンダーな身体のラインをそのまま浮かび上がらせていた。肉感的に張った太ももは桜色に染まり、清楚なニーソックスは吸いきれなかった汗でところどころ染みを作っている。Cカップの美乳は荒い呼吸のたびに激しく上下し、少女の消耗の激しさを示していた。

（く……なんて数なの⁉　これじゃ、きりがない……！）

凛と引き締まった美顔には隠しきれない疲弊とともに、明らかな焦燥が浮かんでいた。

続々と襲いくる怪物と空中戦を繰り広げながらも、少女戦士の意識は上へと向いている。遥か上層から、桁外れに巨大な力を感じるのだ。長く続く肉の縦道に天井は見えないが、この悪趣味な城の最上階に影魔王がいるのは確かだった。

（早く、上に……オメガエクリプスの元へ行かないと……！）

ここで足止めを食っていては、それだけ多くの人々が不幸に見舞われることになる。それに、別れてしまったママのことも当然気にかかる。とにかく、一分一秒でも早く、諸悪の根源である魔少女の下にたどり着かねばならない――自身の窮地にもかかわらず、ユミエルは無垢な正義感に突き動かされ焦っていた。

だが皮肉にも、その純粋な思いやりによって、聖天使はさらなる危機へと陥ることになる。疲弊した状態で、眼前の敵に集中できていなくては、動きに無駄ができて当然だった。

「あなたたちに構っている暇はないわ……そこをどきなさいっ！」
真正面から迫ってくる蛆虫のような怪物に、力任せの斬撃が叩き込まれる。だが、聖少女らしからぬ乱暴な強打は、怪物のぬるぬるした表皮を滑っただけで、刃傷を負わせることはできなかった。焦心のあまり、天使の太刀筋は正確さを欠いてしまっていたのだ。
（あ……⁉　しまった、しとめ損ねた……⁉）
必殺の一撃を外し、天使の美貌に驚きと焦りが浮かぶ。さしたるダメージも受けていない巨大蟲はそのまま突進し、丸い頭部を少女戦士の腹部に叩き込んだ。
「くふっ……あ、くぅぅっ！」
頭部をお腹に押し込まれ、ユミエルは短い苦悶を上げる。しかし、幸いにも怪物の突進は聖衣の防御を破るには至らなかった。スーツに皺を刻んだだけで、致命打には程遠い。
――く……油断したわ！　でも、この程度……うっ⁉
咄嗟に反撃に移ろうとしたユミエルだったが、お腹に走る予期せぬ感触につい動きを鈍らせた。聖天使に頭突きした蛆虫が、そのまま丸い頭部をうねうねと擦りつけてきたのだ。
ぴっちりしたボディスーツの質感と、薄生地一枚隔てた腹肉の柔らかさを愉しむように、蛆虫はくいくいと身体を捩って擦りつけを繰り返した。嬉しげに蠕動する頭部からはねっとりとした体液が溢れ、黒いスーツに汚らしい染みを作っていく。影魔王の生み出した触手蟲は、敵である天使を倒すことよりも、女の柔らかな肉を貪ることを優先していた。

「こ、この……っお！　舐めるな……死になさいっ！」
ぬるぬるした粘液でグラブが汚れるのも構わず、ユミエルは動き回る蛆虫の頭を左手で押さえ込んだ。それでもなおいやらしい蠕動を続ける肉頭を、右手に構えた聖剣で串刺しにする。頭部に重傷を負った肉虫は体液を撒き散らしながら、無様に落下していった。
「く、はぁ、はぁ……！」
怪物の一匹を葬った聖天使だったが、思わぬ苦戦で戦闘のテンポを崩されてしまった。集中が途切れた一瞬の隙を狙い、少女の下方から新たな襲撃者が飛来する。
「はぁ、はぁ……あ、はぅうっ⁉」
腰下に走るぬるっとした嫌悪感に、ユミエルは思わず声を上げた。真下からいつの間にか接近していた敵が、粘つく先端部を後背からお尻に密着させてきたのだ。大量の汗でショーツに吸いつき、薄いスカートに割れ目までをうっすらと浮かせたヒップが、ぷよぶよとしたゼラチン質の肉柱に撫でられている。だが、触手の愛撫はそれだけの単純なものではなく、何か薄い膜状の物体がびろびろと波打って尻肌を刺激しているのが感じられた。
ミニスカートに浮き出た豊麗な美尻を責めているのは、半透明のボディに薄い鰭（ひれ）を広げた、クリオネを思わせる奇妙な触手だった。異形の肉蛇は芯の部分をうねらせながら媚肉の柔らかさを確かめ、うっすらと浮いた尻溝の間に鰭を差し込み波打たせている。全身から分泌される粘液が白いスカートを濡らし、ショーツを通して尻肌に染み込んできた。蠢

く肉鰭によって尻割れを穿るように撫ぜられて、ミニスカート越しに括約筋が刺激される。複雑な愛撫に、お尻の中がうずうずと疼いてしまうのがわかった。

「はっ……ん、く！　こ、この……！」

淫靡な陵辱運動を続ける触手を切り払わんとしたユミエルだったが、状況がそれを許さなかった。上方からは、先端がへら上に膨らんだイカの触腕そっくりの怪物が迫り、前方からは、滑らかな肉の管に円形の口を広げた、吸血ヒルを思わせる青黒い触手が伸びてきている。後ろを向く暇もなく、ユミエルは新たな敵への応対を強いられていた。

（く……！　こ、このままじゃ、いけない……！）

影魔王の城に巣食う肉蛇どもは、一匹二匹は大した力を持っていない。現にいままで、聖少女はたった一人で、数え切れない触手を屠(ほふ)り続けてきた。だが、無限とも思える化物の波状攻撃は徐々に徐々に激しさを増し、少しずつ、だが確実に聖少女の力を削り取っている。蛆虫とクリオネの攻撃を回避できず攻撃を受けてしまったのは、その証拠だった。

「くぅ……！」

包囲され動きを殺されるのはまずい――女戦士は咄嗟の判断で光翼を羽ばたかせ、上方へと飛び上がった。光放つ聖剣を構え、イカの触腕へと自ら肉薄する。各固撃破を選んだ聖戦士は、尻責めの触手を振り切り、自由に空間を使える新たな戦域に移ろうとした。

「いくわよ……っあ⁉　ん、ふぅぅッ⁉」

まずは正面間近の触腕を切り払い、血路を開く――素早い判断とともに聖剣を振り上げた瞬間、ユミエルのお尻がびくん、と震えた。獲物を逃がすまいと、クリオネ触手が素早い反応で天使のヒップを追ってきたのだ。粘液で濡らされたせいで余計にミニスカートに吸いついてしまった尻峰を槍状の頭部で再び舐められ、不気味な感触が腰にまで上がってきた。そのおぞましさに威勢を殺され、剣を振り下ろすタイミングを逸してしまう。

だが、ユミエルの動きが鈍ったのは、それだけが原因ではなかった。

――あ、くぅぅ⁉　なに……お、お尻が……あつい、いっ……⁉

撫ぜられている尻の内側に、蕩けるような甘い感覚が走っていた。おぞましい触手の愛撫に感じてしまったかのように、肛門までがひく、ひくと動き始めている。確かに性感を刺激するようないやらしい動きではあったが、それだけでこれほど感じてしまうはずはなかった。ましてや、相手はただの怪物だ。嫌悪感こそ覚えても、悦びなど感じるはずがない。それなのに、ユミエルの身体は、まるで発情した牝のような反応を示していた。

あさましいまでの肉体の反応に戸惑い、凛たる戦士の貌に当惑が浮かぶ。気付けば、先ほど蛆虫に体液を塗りつけられたお臍も、ぼぉっと熱く疼き始めていた。

――こ、これ……？　あふぅ……そ、そう、か……っ！

光翼天使はいままでの経験から、一つの結論に辿りついた。恐らくは、触手たちに塗りつけられた粘液に、女体を狂わせる催淫作用が含まれていたのだろう。欲望の力を統べる

影魔王の道具に、数多のエクリプスが持つ異能力が備わっていてもまったく不思議はない。
直接身体に浴びせられずとも、ねっとりとした体液は衣服の布地を浸透して少女の美肌を濡らしていた。影魔の打撃を緩和するコスチュームの防護効果も、神経を直接侵す催淫作用までは防げない。このまま戦いを続ければ、聖衣の防御は破られなくても、徐々に性感を高められ、発情させられた肉体を責められることになってしまう――。
――く……なによ、この程度で……！　でも……くぅ、お尻、熱い……！
ユミエルは心の中で自分自身を激励し、戦いへの集中力を高めようとした。だが、媚毒に侵されてしまった敏感な女体までは御しきれない。ひくひくと蠢いて快感を求める尻門のあさましさに、聖少女は顔を赤らめて煩悶した。そして、その一瞬の隙が仇となる。
聖剣の斬撃を免れたイカの触腕が、天使に向かって自ら身体を近づける。ひらぺったく広がった掌部が狙うのは、ボディスーツにぴっちりとフィットしているCカップの左乳房だ。瑞々しく張り詰めた乳果実を包み込むように、イカの掌がおっぱいに引っついた。
「くぅぅ……っはぁ！　ん、んふぅっ……！」
胸を走り抜ける甘い痛みに、ユミエルは思わず艶かしい声を上げてしまった。やはり怪物の体液の影響か、ただ触られただけでも敏感に感じてしまい、痺れるような快美が駆け巡る。だが、イカ触手の乳責めは、ただ掌部で胸峰を包み込むだけでは終わらなかった。
「あ、あぁぁぁあぁ⁉　ひぃ、あっふぅぅぅぅ……～っ！」

乳肉をきゅうっと抓り上げられる肉悦がいくつも炸裂し、ユミエルはケープを震わせ身悶えた。いくつもの小さな口に、おっぱいを吸い上げられ揉みくちゃにされているような感覚――凛たる聖戦士から牝の泣き声を搾り取っているのは、イカの掌に生えた、小さな吸盤の群れだった。肉へらの裏側には、小さな吸盤がみっしりと密生していたのだ。黒い布地に隙間なくくっついた吸盤は、強力な吸引力で容赦なく乳房を吸いまくっていた。吸盤の内側からも粘液が分泌されていて、スーツを通して肉峰にまで染みてくる。黒い生地に密着した円盤の吸引力は激しく、スーツの内面の乳肉までを吸い込んでくるほどだ。

「あ……っは、ふぁぁ！　こ、このぉ……っ、や、やめなさ……い、いっ！」

左乳房にかかる淫惨な過負荷に、聖少女は首を左右に振って悩乱した。黒いボディスーツを透過した粘液が乳肌に染み入り、おっぱい全体がじゅわぁ、と熱くなってくる。乳峰全体が張りを増して、もともとフィットしていたボディスーツはきつく感じられるほどだ。ぴんと勃起してしまった先っちょがスーツの裏地に擦れ、切ない痛痒感が乳芯に走った。

窮屈な生地を押し上げて自己主張している肉果実は、陵辱者にとって最高の獲物だ。触手の内側がぐじゅり、と蠢き、粘液まみれの吸盤が開いて浮き出した乳首を呑み込んだ。

「っあ、やひぃ⁉　ち、ちくびぃ……っす、吸うな……あぁ！　くひっ、いひぃぃ……！」

敏感な性感帯を集中的に責められ、金髪少女は小さく胸を仰け反らし煩悶した。火照らされた先端を強力な吸引力で搾られ、鋭い快美がおっぱいの中を駆け巡る。吸盤の中に無

理矢理引き込まれた乳芯は、ぴくぴくと痙攣して快感に悶えていた。痛みを伴う被虐の肉悦に、聖少女の顔に朱が走る。その間にも、クリオネ触手は鰭を波打たせて尻肉を貪り続けていた。時間をかければかけるほど、状況は聖天使にとって不利に傾いていく――。

――んふぁ、おっぱい……はじけちゃうっ！　こ、こいつ……なんとか、しないと！

喘ぎ混じりの気合を吐き出し、ユミエルは左手で太い胴を掴んだ。白い手袋を粘液にまみれさせながらも、肉蛇の胴体をぎゅうっと締めて反撃する。イカ触腕は苦しそうに胴体をうねらせたが、それでも決して美味しいおっぱいを離そうとせず、凄まじい吸引力で肉豆を嬲り続けていた。執拗な乳辱触手の対応に追われているユミエルに、下から迫っている新たな陵辱者に気付く余裕などあるはずがない。身悶えするたびに翻るスカートから覗く純白のショーツへ向かい、吸血ヒルを思わせる青黒い化物が進んでいく――。

「く、こ、このぉ……あ、ひぃ!?　やっ……そ、そこ……はぁっ！」

突如股間に走った新たな肉感に、白衣の戦士は思わず怯えた声を上げてしまっていた。いつの間にか下から伸びてきたヒル触手が、頭部をスカートの中に押し込んできたのだ。

肉ヒルは白いパンティにぐりぐりと頭を擦りつけ、少女の性感を嬲っていた。催淫毒で発情させられたうえに乳と尻を執拗に責められ、天使の秘花はすでに興奮しきって恥知らずな涎を滴らせている。汗と愛液で湿ったショーツが、ヒル触手の粘液でさらに汚された。ぐっしょりと濡らされたパンティから、少女の性器が浮き出してくる。

――オ、オメガエクリプス……⁉　わ、わたしの身体で……一体、なにを……。
驚いているのは悠美も同じだ。突然ペニスを取り出し掴むという破廉恥行為に、心の中で悲鳴を上げる。だが、少女の心を満たしていくのは、恥辱と驚愕だけではなかった。
――こ、こんな……おちんちん、握るなん……あ？　お、おちん、ちん……。
グラブ越しに伝わる男根の感触に、少女は無意識のうちに惑溺していた。様々な怪物に犯され媚毒漬けにされた肉体は、いまも切なく疼き続けている。掌に広がる肉棒の形、徐々に大きくなってくる躍動感、鼻をつく性臭――発情しきった少女は、間近の男性器にどうしようもなく惹かれつつあった。それに、この体勢ですることといえば――。
――あ……⁉　あなた……舐めちゃうの……？　おちんちんを……お、お口で……？
男のものを口に含み、しゃぶる――焦燥の少女は、その意味するところに、いつの間にか胸を高鳴らせてしまっていた。お口の中に感じられるであろう肉茎の逞しい感触や牡味が想起され、じゅわぁ、と涎が垂れてくる。発情の檻から抜け出せない聖少女は、半ば無意識に、自分の身体が淫らなフェラチオ奉仕を行うことを期待してしまっていた。
そして、欲望の支配者たる魔姫は、肉欲に乱された少女の希望を裏切らなかった。
「はむうぅ……っんちゅぅ」
しなやかな指を折り曲げて肉棒をぐっと掴むと、小さなお口を開いて亀頭をぱくり、と咥え込む。少女の肉唇の柔らかさに、含まれたペニスはビクリ、と痙攣して喜んだ。

「う、うわぁ！　おい、こ、これは一体どういう……」
「んくちゅ……で、ですからぁ……ちゅむぅ。力を貸して、欲しいんですぅ……くちゅ」
説明の言葉もそこそこに、天使は男の分身に舌を絡めていく。小さなお口の中は狭かったが、涎で湿った頬肉も舌も蕩けるほどに柔らかく、男の逸物を優しく迎え入れた。根元を掴んだ肉棒の前半分ほどを咥え込むと、聖女はお口全体でフェラチオ愛撫を始める。
「ちょ、ちょっと……う、うああ！　くぅ、だ……す、すげっ……！」
魔姫が少女の肉体を操って行うご奉仕は、清純そうな外見とは裏腹に、あまりに淫らで熟達していた。唇を窄めて肉竿を締めつけながら、ゆっくりと首を前後させて全体を優しく愛撫する。前後運動と同時に、歯を立てないようにしながら亀頭冠を軽く甘噛みし、鈴口に舌先を宛がって射精口をほじくるように刺激した。砲身を掴んだ右手の指を蠢かしてペニスの根元を優しく愛撫しつつ、空いている左手を男の股間に伸ばす。滑らかなエナメル地で包まれた指先で陰嚢を持ち上げると、擦るように優しく愛撫した。最初こそ抵抗していた男だったが、若い肉体は正直だ。いつ怪物が襲ってくるのかわからない極限状態なのに、口奉仕に悦ぶペニスは萎縮するどころかギンギンに勃起して先走りを流し始める。
――あ……やぁ、すご……！　こ、こんな、大きく、なっちゃうなんて……！
膨張した肉根によって、少女の狭隘な口腔はすぐさまいっぱいにされてしまう。喜んだ牡塊に柔らかな内頬を押され、悠美は圧迫感とともに言い知れぬ恍惚を感じていた。影魔

姫は少女の淫心を掻き立てる様に、激しく小顔を動かしてフランクフルトを頬張り続ける。硬く熱い亀頭がお口の中を抉りまくり、肉悦を切望する少女の性感を切なく刺激した。
「んむぅ……っふ！　ふっ、太くてぇ……ちゅぷぅ。た、逞しいれふぅ……んンっ！」
行為の最中に漏れる甘声が男の欲心を刺激し、さらなる興奮を誘う。どんどん肥大化する剛直にたっぷりと涎を塗り込めつつ、情熱的なフェラチオを続ける幼顔の聖女。唇の締めつけを加減し、ちゅぱちゅぱといやらしい水音をわざと響かせて男の欲情を掻き立てる。垂れ気味の瞳はうるうると震え、紅潮した顔は発情した牝の悦びに満ちていた。桜色の肉唇は零れた涎と先走れで濡れ光り、なんとも艶っぽい雰囲気を醸している。影魔姫は少女天使の身体を用いて、肉体的にも精神的にも男を悦ばせる熟達の淫技を駆使していた。美味そうに太肉棒をしゃぶり続けるその姿は、色狂いの淫乱豚にしか見えない。
「お、おいおい……ユミエルちゃん⁉　な、なんてことしてんだよ……⁉」
苦悶する少女の本心など知らない観衆は、救世主だったはずの聖女が見せる恥態に当惑の声を上げた。若い男たちの中には、セクシーなコスチュームに身を包んだ美少女ヒロインが行う淫猥奉仕に、いつの間にか見惚れてしまっている者もいる。公衆の面前で破廉恥なフェラチオショーを披露する変態天使に、驚愕と好奇の視線が集中した。
――ち、違う……！　わ、わたしじゃないの……あんっ、そんな目で、見ないで……！
困惑と侮蔑、欲情に嫌悪――痛い視線に込められた数多の感情を生々しく感じ、無垢な

少女の羞恥心が燃え上がった。たとえ操られているとしても、痴女のように男根にむしゃぶりつき、人々に恥知らずな嬌態を晒しているのは、紛れもなく自分自身なのだ。恥ずかしがりな少女の廉恥を受けて、あどけない顔が耳まで赤く染まった。熟達の奉仕を続けながらも可愛らしく恥じらいを見せる美貌が、男の欲心をさらに掻き立てる。清純な少女に汚いものを舐めさせているという征服感に興奮し、警官の剛茎がさらに膨張した。限界まで張り詰め脈動する剛肉棒は、いまにも欲望の塊を吐き出しそうなほどに滾っている。

――こんな……。お、おちんちん咥えるなんて……あ、おちんち……ん……いぃ……。

あまりの羞恥と屈辱に、悠美は気が遠くなる思いだった。だが同時に、聖少女はこの異常な状況に理性を蝕まれ、逃げられない愉悦に溺れつつあった。口を動かしているのは他人でも、口腔内の感覚は自分のものとして伝わってくるのだ。狭いお口の中いっぱいに広がった肉棒の逞しい存在感が、徐々にいとおしいものに感じられてきてしまう。

――はぁあ……あ。ダ、ダメ……ダメなのに、わたし……う、嬉しい、ぃ……！

お口の中で大きく膨らんだカリの張り、舌先に伝わる逞しい脈動、漏れ出すカウパーの粘りと苦味、鼻をつくペニスの牡臭――それらは、先刻まで自分を虐めまくっていた異形の触手とはまるで違う。女を喜ばせるための肉宝に、焦らされ発情させられたままの少女は徐々に陶酔していく。誰とも知らない男のものが、愛しくて嬉しくてたまらない――。

「ふぁぁ、ま、また大きふ……んぷっ！　お口の中、う、動ひて……あぁ、すごぃ……！」

影魔姫の演じる淫乱天使は、悠美の本性を的確に映し出していた。恥ずかしくてたまらない、といった面持ちのまま、貪欲な快楽運動を決して弱めることはない。黒髪を振り乱しながら激しく首を前後させ、口辱奉仕の変身ヒロインは爆発寸前の剛直をひたすら貪り続けた。細い腰はいつの間にか激しく揺らされ、くいくいと淫らな空腰を使っている。

「お、おああぁ……ダ、ダメだ！　も、もう出ちまう……っ！」

どぶぶぅっ！　天使の清純さと悪魔の淫猥さを兼ね備えた聖少女のご奉仕に、警官はあっけなく絶頂してしまった。狭隘な口腔内に、夥しい量の精液がぶちまけられる。欲汁をぱんぱんに詰め込まれた少女の頬っぺは、餌を頬張ったリスのように膨らんでしまった。

「んぷぁ……む、ぅん！　あふぅ……あぁぁ、ミルクぅ、いっぱひ……れすぅ……」

どくどくと噴き出す白いマグマを、天使の少女は嬉しそうに嚥下する。発射の衝撃で暴れるペニスを握り締め、口から少しも離さずにすべての欲汁を受け止めた。あまりの発射量に入りきらなかった白濁が口唇から逆流しても、牝の悦びに爛々と目を輝かせた淫乱天使は少しも頓着しない。紅潮した童顔が吹き零しの漏粘で白く染まり、顎先から垂れた精雫がケープを濡らしボディスーツを汚した。その間にも、黒髪少女はこくこくと喉を鳴らし一心不乱にミルクを飲み続ける。精飲天使の姿は獣のように貪婪で、そして純粋だった。

――うあ、お口、ミルクでいっぱいぃ……！　だめ、熱くて……お、おいしいぃ……！

喉奥に注がれ食道に流し込まれていく白粘ジュースの味は、当然悠美にもしっかりと伝

わってきている。すえたような汚臭を放つ、苦くてまずいはずの牡味を、いまの少女は極上の甘露に感じていた。おぞましい化物に含まされ無理矢理に擦り込まされた発情粘液とは明らかに違う、独特の苦味を持った牡の射精汁が、美味しくて美味しくてたまらない。

――あはぁ、い、いい……。お、おちんちんのミルク……もっと、欲しいよぉ……。

オメガエクリプスに身体を操られ、逞しいペニスの肉感に耽溺し、美味しい精液ミルクに酔わされて――魔悦に囚われたままの悠美は、急速に欲望の奈落に落とされていく。

「ん、はあぁ……ちゅる。あ、ありがとう、ございました……んふう、ちゅぷっ……」

放精をやめ萎えていく男根をゆっくりと口から離すと、幼顔の黒髪天使は上目がちに男を見上げて礼を述べた。萎えかけた亀頭に優しくキスをして、名残惜しそうに唇を離す。

「あ、あの……あ！　お、おいユミエルさん！　あ、あんた……一体なにを……」

凄艶な口唇奉仕に見惚れ、いままで動けなかった男の一人が、思い切って声をかけた。他の人々も考えは同じで、疑惑と侮蔑の入り混じった数多の視線が天使に注がれている。

「え……？　んふふ……ですからぁ……んちゅ。力を、貸して頂いたんですよ……。病院でわたしの変身を見ていたあなた方なら、わかってらっしゃるんじゃないですかぁ……？」

粘汁が糸を引く舌をぺろんと伸ばし、顔と手袋に付着しているミルクを貪欲に味わいつつ、幼き天使は自分が行っていた淫猥行為の真実を告げる。それこそは、オメガエクリプスが聖天使を貶めるために仕掛けた、邪悪にして恥辱に満ちた淫罠だった。

「わ、わたしは……んちゅ。み、みなさんの、その……ぉ。お、男の人の……あ、あの。おちんちんから出る……ミ、ミルクのおかげで……へ、変身できるんですぅ……」

――え……な！　ど、どうして……あぁぁ。そ、そんな酷い……嘘をっ……。

魔少女に語らされた虚偽に、悠美は戦慄を禁じえなかった。本来ならば、聖なる力をこのように卑下されて黙っている変身少女ではない。だが、燻っていた牝悦を擽られ快楽に溺れかけたいま、天使はもう、影魔姫に抵抗する心力を失っていた。それに――。

――そ、そんなこと……いま、そんなこと言っちゃったら……み、みんなが……ぁ。

オメガエクリプスの行おうとしていることに、悠美は薄々気付いていた。どうして、人々がたくさんいるこの場所に降り立ったのか。どうして、あさましく男を誘い、淫らな奉仕姿を人々の前に晒したのか。そして、このように恥辱に満ちた虚偽を語るのか――。

「そ、そうなのか……。じゃあ……きみに力を貸す、っていうのは……そ、その」

黒髪天使が言わんとする言葉を理解し、周囲の人々も悠美の心と同じく動揺していた。

影魔王は少女の肉体を操り、淫らな笑みを浮かべて答えを述べる。

「ええ……そ、そうですぅ。わ、わたしを……あの。犯して欲しいん、ですぅ……」

――うあぁ……や、やっぱり！　わたし、この人たちと……させられちゃうんだ……！

予期していたのとまったく同じ展開に、少女は心の中で戦慄いた。ホールの中には百人以上の人間がいる。操られた肉体は彼らを迎えさせられ、淫らな肉愉を貪らされるのだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!

魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて! キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!! ※いずれも18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!